

被災生徒・学生支援のための特別奨学金給付

東日本大震災以来、同窓会では、全国支部会員の皆様方をはじめ多くの方々から義援金を頂戴しております。

苦しみや悲しみを背負った若い姉妹たちに思いを寄せる同窓生や関係者の皆様のご厚意に感謝しつつ、いただいた義援金を同窓会特別奨学金として、被災した生徒・学生に給付することに致しました。従来の同窓会奨学金とは別に、二〇一一年度から六年間に亘る支援活動になります。

また、チャリティイベントの収益金を奨学金基金に繰り入れようと、イベント開催に向けたプロジェクトチームを立ち上げたところです。同窓会は、いかなるときも母校が神様の恵みに支えられますようにと祈り、心を寄せております。

『苦難の時を超えて』

―戦中戦後の卒業生へのアンケート集―

同窓会資料委員会 岩淵淑子

宮城学院創立125周年にあたり、同窓会では標記の記念誌を発刊いたしました。宮城女学校第53回卒業生(84、85歳)から新制高等学校第5回卒業生(77、78歳)までの方にアンケートをお願いし、289名から貴重な回答を頂きました。

この時代は、太平洋戦争勃発(1941年12月8日)直前から、日本が敗戦を迎え民主化するに至るまでの激動の時代です。この方々から寄せられた「生」の声を記録することにより、次代の母校の発展に寄与することを願って編集いたしました。

当時の教育は、軍国主義の国策によって、その影響を大

きく受けざるを得ませんでした。キリスト教は、敵国アメリカの宗教であるということから、本校は礼拝は勿論、キリスト教による学校教育が全く不可能となり、それは敗戦により、教育改革が行われるまで続きました。正に建学の精神が揺るぎかねない危機的状况下にありました。

生徒達は横須賀、多賀城等の軍需工場へ動員されたり、農家の手伝いをさせられたりしました。毎日の食料にも事欠く状態の中にあっても、互いに助け合って一日一日を過ごしたと記載されています。

「汝の隣人を愛せよ」との聖書の教えが自然に身についていたと思われる。

さて、先日、宮城学院中学校・高等学校の礼拝でこの記念誌について話をする機会がありましたので、少々触れてみたいと思います。



河北新報 2011年12月7日掲載

地元のテレビや新聞でも話題になりました。ご希望の方には一冊1,200円でおわけし、収益金を同窓会奨学金とさせていただきます。<問い合わせ先:同窓会022-279-6675>

先ず動員された先輩の話を皮切りに、1945年7月10日未明の仙台大空襲が地獄絵図さながらだったことを伝えました。この記念誌の中の仙台大空襲直後の写真を見ると、中心部は全くの廃墟と化し、母校もその例に洩れずほとんど消失した様子が分かります。驚いたことには、東日本大震災でテレビに映し出された津波の後の瓦礫の街と全く同じ風景だったことも話しました。最後に後輩の皆さんにメッセージとして以下のことを話し、結びとしました。

―皆さんには、輝く未来があります。しかし、未来を輝くものにできるかどうかは、皆さん自身の肩にかかっています。勉強の好きな人は自分の好きな勉強に励めば良いし、それ以外のことで特別な才能を持っている人が必ずいるはずで、得意なこと、好きなことは神様から贈られた賜物なのです。今はそれを見出し磨きをかけて時期なのです。そしてその得意なものを、皆さんが成長した暁に、世の中のために生かしてください。卒業後も宮城学院で学んだ聖書の教えによって結ばれた「絆」を大切に、この学び舎で学んで本当に良かったという日が来ることを願っております。―

編集後記

泉ヶ岳から吹き降ろす風は、肌を刺す冷たさで春の訪れは遠いと感じます。でも冷たい土に、堅い枝先に確かに命の息吹があるはず。被災当時、学び舎から卒業生を送り出すことさえ想像ができませんでした。が、今力強く巣立とうとする若人達を見送る幸せを感じています。

旅立ちを待つ全ての人々に幸多かれと心よりお祈り申し上げます。



学校法人 宮城学院

981-8557 仙台市青葉区桜ヶ丘9丁目1-1
TEL 022(279)1311
[URL]http://www.mgu.ac.jp/home/
[e-mail]somu@mgu.ac.jp

創立百二十五周年 特別対談

東京大学大学院 工学系研究科都市工学専攻 教授 石川 幹子氏
宮城学院 理事長・学院長 松本 宣郎

被災から一年…そして巣立ち

甚大な被害をもたらした東日本大震災から一年。さまざまな思いを抱えて過ごした生徒・学生たちが新たな門出を迎えます。そこで宮城学院中学校・高等学校の卒業生であり、現在、東京大学大学院で教鞭を執られる石川幹子教授をお迎えして、宮城学院で過ごした六年間の豊かな学びについて、また精力的に進められている石川先生の故郷・岩沼市の復興について、松本学院長がうかがいました。

「地の塩」になる
その言葉を原動力に

松本 石川先生は今回の東日本大震災で被害を受けた、故郷岩沼市に復興支援を申し出られ、現在は岩沼市震災復興会議の議長を務めていらつしやいます。まず、そこに至る経緯をお教えいただけますか。

石川 私の専門は都市工学で、環境デザインを手がけています。つまり人の暮らしと森や緑、水環境などがどのように関わっているかを調査し、実際に設計をして、新しい空間を創り出すことに取り組んでいます。ひと言で言えば、「生態学に基づく風景をつくる」と

いうことになるのですが、実は私は宮城学院で教わったことをそのまま職業にしております。今回の震災復興もその延長なのです。津波でなくなっってしまった街や風景、人と人とのつながり、暮らしといったものを、どこにどう帰す(よりよいかたちで再構築する)のかを考える時、基盤になっていたのは、すべて宮城学院で教えていただいたことなのです。

松本 具体的にはどのようなことですか。

石川 一つは私が中学・高校と、六年前在籍した生物班での活動です。先生に仙台近郊の里山や、今回の地震による津波で壊滅した海岸公園などに、よく連れて行っていただきました。そんなフィールドと密接にリンクするような学びを積み重ねるうちに、自然と人の暮らしに関わる学問がしたいと思うようになり、それが東京大学農学部への進学につながりました。初志貫徹ではありませんが、宮城学院で受けた教育をライフワークにしているということになると思います。

そしてもう一つ、キリスト教精神に基づく「地の塩にならさい」という教え。ミッションとでも言いましょう

か、この言葉がいつも私の原動力になってきました。

松本 「地の塩、世の光」。世のため、人のためになりなさいというこの言葉が、心に残っているのですね。

ところで、先生が進めている復興支援の一つに「ペアリング支援」がありますが、これはややもすると被災者の方々が感じてしまう「見捨てられてしまふのではないか」という不安や悲しみを払拭する、心の支援“とも言えるのではないのでしょうか。

石川 そうですね。私は二〇〇八年に発生した中国・四川省の汶川地震の復興支援に継続的にたずさわってきましたが、「ペアリング支援」はその時に使われた手法です。被災地の特定の市町村と、特定の県がペアを組んで対象地を明確にするもので、被災地の実情に応じた、きめ細かな支援ができるのが特長です。今回もこの「ペアリング支援」を採用して、岩沼市を東京大学が支援しているというわけです。

松本 岩沼市の井口経明市長をお訪ねになったのは、いつごろですか

石川 地震発生から一ヵ月後の四月十二日です。私個人としてはなく、東京大学として「ご支援したい」と申

石川 幹子

岩沼市出身。宮城学院中学校・高等学校を卒業後、東京大学農学部に入學。1972年東京大学農学部農業生物学科卒、76年米ハーバード大学デザイン学部大学院ランドスケープ・アーキテクチャ学科修士課程修了、94年東京大学大学院農学系研究科農業生物工学専攻緑地学博士課程修了。慶應義塾大学環境情報学部教授を経て2007年より現職。博士(農学)。岩沼市震災復興会議議長、宮城県震災復興会議委員も務める。



東京大学出身のお二人。学生時代の話題に花を咲かせる対談前のひとコマ
仙台国際ホテル(宮城学院跡地)にて

”お一人おひとりの
生きた証”を記憶

松本 岩沼の現在の復興状況をどのようにご覧になっていますか。

石川 それにつきましては、順を追ってお話しさせていただきます。岩沼市復興会議が五月にスタートし、八月には「岩沼市震災復興計画グランドデザイン」愛と希望の復興「をまとめた。将来、どんな街になるべきかという「理想」を具体的に計画をつくり、これをもとに翌月、行政計画が策定されました。

まず被災実態をしつかり調査しようと思ひ、津波によって亡くなられた方の住所と、ご遺体が発見された場所の情報を市から提供していただ

【特集】

き、その場所を示した地図をつくりました。今回の震災で、この地域では一六八名の方が亡くなりました。お一人おひとりに生活があり、生きた証があったのですから、私はその方々の記憶というものが数字で語られることに理不尽さを感じていました。ですから、新しい街をつくろうとしている今、「津波が到達したこの区域に住んではいけない」とか、「ここはどう判断すべきか」と迷った時、この地図に立ち戻って考えなければならぬと思っています。それが亡くなった方々の記憶を受け継ぐということになるのではないのでしょうか。

このような情報は非常にデリケートなものですから、公表してよいか否かを市に相談しました。すると井口市長は「これは絶対に公表すべきです」と、私の考えに大変深い理解を示してくださいました。

報いを求めず
人に与えよ

石川 岩沼市の復興計画の内容を、かいつまんでお話ししますと、まず「速やかな仮設住宅の建設と暮らしの安定」ということで、岩沼市は全被災地に先がけて、六月三日に希望する全員に仮設住宅のカギをお渡しし、避難所を閉鎖しました。しかも心の絆を大切に



石川氏の行動力に感心しきりの松本学院長

しようというところで、町内会単位での仮設住宅への入居を実施しました。また「コミュニティを大切にしたい集落再生」ということで、津波が押し寄せた地域を図面に示し、それ以外の場所への集団移転を計画しています。実行まで、あと一步のところまで来ています。このほか、海水に浸かってしまった土地でもよく育つ作物であるトマトを植えて、一本も枯らすことなく、とても甘いトマトに育て上げ、「復興トマト」という名前で販売、大ヒットしました。リアリティのある農業復興がすでに進行しています。

それから医療機関とジョイントして、看護医療系の大学や研究所、医療産業を集積させて雇用を創出しようという計画もあります。そこには医療クラウドというITを活用した地域医療システムの実験都市にしようという取り組みも含まれています。さらに公共事業として、防潮堤をはじめ、複数のがれきの丘、集落ごとに設けるコミュニティ居久根



復興支援について熱心に話す石川氏

(いぐね／屋敷林)などを用いて、津波の勢いを減衰させるだけでなく、景観的にも美しい「千年の杜」を創り上げようとしています。

松本 本場に積極的な活動をされていらっしゃるんですね。迅速に動くこと、リーダーの決断、お互いの顔が見える「ペアリング支援」など、一つひとつがつながって、必ずや大きな実を結ぶことでしょう。

石川 ありがとうございます。これからも、できる限りの支援を続けてまいりたいと思います。実は東大の大学院の学生と一緒に、被災された方々に理想の新しい街を描いてもらうワークショップも行ったんですよ。

松本 学生たちにとっても、それは印象深い体験となるでしょう。それでは最後に、この春、本学を巣立つ後輩たちにメッセージを頂戴できますか。

石川 中学・高校という時代は、その人の一生の基礎を築き、耕す時代だと思っています。私はその中で「報いを求めず、人に与えよ」という、まさに讃美歌の一節にもある奉仕の精神が育まれたと思っています。

松本 「報いをのぞまで、人に与えよ…」讃美歌の五三六番ですね。**石川** そうです。私はやはり、「奉仕の精神」が一番大切ではないかと思っています。感謝の心を持って、世の中に奉仕するという心で果立っていくと、たくさんのお会いに恵まれ、奉

仕をしているつもりでも、みんなが助けてくれる…そんな喜びを味わうことができると思います。

松本 本日は、大変充実した時間を共有させていただきました。ぜひまた宮城学院にもお越しください。**石川** ありがとうございます。



石川氏が震災復興会議議長として取り組む岩沼市復興「千年希望の丘」プロジェクト

石川幹子さんは宮城学院中高ご出身の都市工学という最先端分野の研究者として、数年前に母校で後輩生徒たちにお話をしてくださっています。宮城学院の懐かしい想い出があらたに、からこそ、今回もご協力いただけたと感謝しています。東三番丁の旧校舎をとりわけ懐かしがっておられました。

自然・環境と人間の共生を追求され、それを実際のコミュニティ建設に実践されるご研究がこの大震災に遭った故郷の復興に生かされています。その尊いお仕事に、宮城学院で教えられた愛と奉仕の精神の支えがあったのです。

時間を忘れるほど、熱意を込めて故郷岩沼と宮城学院への強い思いをお語りいただきました。どうやら私たちは一時期同じ大学に通う私鉄沿線沿いに住んでいたことも判明しました。今後のご活躍をお祈りします。(松本宣郎)



県内公共施設が長く使用できなかったことから、大学講堂の借出しなど文化公演を一つでも実現するための支援も重ねてきました。

被災学生・入学生へも支援を継続

東日本大震災により被災された方の経済的負担を軽減し、学生・生徒の修学の機会を確保するため宮城学院では、被災学生・生徒への支援を重ねてきました。これらの支援は2012年も継続して行います。詳しくはホームページをご覧ください。

《中学校・高等学校》
http://www.miyagi-gakuin.ac.jp/topics/2011/mg2011116.html
《大学》
http://www.mgu.ac.jp/shiensaku/2012hisaigakusei.html

聖書に聞く

酒井薫

時間の経つのは早いものです。去年の3月11日から早くも一年になります。私たちの進歩は正に牛歩のごとくですが、時間は止まることなく1年366日が経過いたしました。そして3月・4月は旧新・卒業・入学の入れ替わりの時季でもあります。園児・中高大学生の卒業に関わる時、彼らの一年分の

成長の姿を見た時、こちらはその分成長したのだからかと自問し立ち止まり、自らの姿を振り返られ考えさせられます。

子どもたちの1年はいわゆる大人たちの5年分も10年分位もあるように思われます。それほど子どもたちは成長した姿を見せてくれます。あの子こんなに背が高くなったの、よくずーと我慢して座っていたね、と驚きの姿を彼らは見せてくれるのです。その

ように大きな幅の成長期を持つている彼らのそばで私たちは教育活動に関わらせていただきたいとおります。

園児だと3歳児から、中1の12歳から高校の17・18歳まで、大学生・院生・社会人学生だと20歳位から60歳70歳までもの生徒・学生がこのキャンパスには存在し、私たちは

幼子は成長して、大人へ

幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた。

(1コリント13章11節)

関わるのが許されています。それらの人の人生の大切な内容と対応と教育材料とを用いて関わっているのか、大きな問いの前に私たちは立たされています。幼子には幼子の時代を、成人には成人したものの成長に関わるのです。こちら、のんびりかまえてはい

『あの日』から一年

3月11日14時46分。あの瞬間から始まった日々は、人々の上に経験したことがない激動をもたらしました。



本学では被災当時、学生生徒への安全確保を最優先に体育館での避難対応が行われました。その後、キャンパス内の施設被災状況調査、復旧作業が随時行われてきました。

建物の被害状況

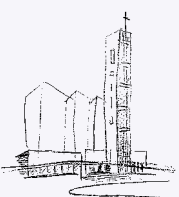
礼拝堂、音楽科ハンセンホール学生センタ小ホール他…天井の一部や、照明器具落下、パイプオルガン…一部破損、空中歩廊…一部破損、家政館…地盤沈下、外壁破損、水栓破裂、実験機器落下、中高棟…一部地盤沈下、ガラス破損、中高グラウンド…地盤沈下、地割れ、中高体育館…地盤沈下、ガラス破損等

地元の復興へ貢献を

4月、余震による影響が色濃く、ボランティア説明会には200名を超える学生が集まりました。その熱意は今も継続し、復興へ少しでも貢献できるよう活動しています。

●派遣のべ人数…1439人
●派遣先団体数…33団体
●MGプロジェクト数…5プロジェクト(MGLAC1月末調査)

生活物資供給が、最優先だった被災当時から1年が経過し支援の形も、子どもの学習支援、被災地区の子どもへのお弁当づくり、チャリティーコンサート、聞き取り調査など大学での学びを基礎とする、多方面にわたる内容で実施されています。



幼稚園だより

♪修了おめでとう

幼稚園で過ごした日々はみなさんの宝物です。友達と一緒に遊んだこと、励まし合ったこと、喜び合ったこと、そして競い合ったこと、その一つひとつが財産



です。きっとこれからの生活に役立つことでしょう。

まもなく、みなさんはそれぞれの小学校に分かれ、一人ひとりの歩みを始めます。その土台がこの幼稚園です。これから出遭うさまざまなことに、幼稚園で学んだ3つの心

?=不思議に思う心 ! =感動する心 ♥=思いやりの心

を大事に取り組んでいってください。

神さまがみなさん一人ひとりを見守ってくださっています。自信をもって取り組んでください。

(宮城学院女子大学附属幼稚園 園長 三浦友悦)

♪こんなに大きくなりました

3歳児

入園した当初、お母さんと離れるのがさびしくてたくさん泣いた子ども、玩具の取り合いでたくさん喧嘩した子ども、できない所は、先生や年長さんにしてもらっていた甘えんぼさんも…みんな少しずつ大きくなって進級の時期を迎えました。

この一年、遊び、生活、行事の一つ一つが子どもたちにとって新鮮な出会いとなり、それらの経験は全て一人一人の力となりました。

これからは、ひとつお兄さん、お姉さんになって小さいお友達を迎えるのを楽しみにしている子どもたちです。



4歳児

友達の気持ちに気付いたり、思いを受け入れたりしながら生活することができるようになり、優しくすること、優しくされることの心地よさを、繰り返し味わってきた1年でした。

毎日の生活の中で、また、様々な行事への取り組みを通して、友達とのかかわり方を学びながら『友達っていいな』という仲間意識もめばえました。少し苦手なことにも、最後まで頑張る気持ちが育ってきています。

素敵な年長組のお兄さん、お姉さんになる日を楽しみに、準備をしている子どもたちです。



MG Today

2011年度キャリア支援について 2月27日に宮城学院単独企業研究会～70社参加

学生支援グループ 菊田 敏秀

●現4年生向け就職活動支援

まだ就職が決定しない4年生に対しては、下記支援を継続しています。

- ①大学受理の求人票の案内(まだまだ求人はあります)
- ②行政、民間主催の企業説明会の情報提供
- ③個別相談の継続(履歴書添削、面接指導)

「3月末の卒業までに絶対決める」というあきらめない気持ちが大切です。大学もサポートしていきます。

●現3年生向け就職活動支援

会社訪問のスタート時期が、例年より2ヶ月遅れの12月となりました。就職協定では4月より選考・内定出しが行われます。学生は、今、会社訪問・説明会で企業研究・仕事研究を行い、ESや履歴書の提出を求められています。

採用の先陣を切るのはいわゆる大手・有名企業ですが、ここでできるだけ多くの企業を訪問し、企業担当者の話を聞きながら、自分の価値観に見合った選択をしていくことが重要になります。行動力が試されます。

●研究会で多くの企業担当者と積極的に接する

2月27日(月)に、宮城学院の単独企業研究会を仙台駅前のアエルで開催しました。当日は約70社の企業が午前・午後に分かれて参画しました。宮城学院の卒業生を採用してきた実績のある企業ばかりです。多くの学生が当日足を運び、多くの人事担当者と話しをする機会を、積極的に持つことができました。



●新しいキャリア支援の試み

3年生向けの2011年度就職ガイダンスでは、以下のような新しい内容に力点をのいた支援を行いました。

第1に内定をもらった4年生を囲んで、座談会形式の体験報告会を毎日昼休みに実施。業種別、職種別、学校推薦、公務員などテーマ毎により多くの4年生から体験談を聞くことができました。

第2にグループディスカッションを取り入れた就職講座を実施。「何のために働くのか」、「大学時代に学んだことは？」など、実際、選考の際によく問われるテーマを使用。グループディスカッションを通してアウトプット力を高めました。

キリン絆プロジェクト presents 復興応援コンサート レ・フレール ピアノ・スバシアルin SENDAI

クリスマスイブの12月24日に「復興応援コンサート レ・フレール ピアノ・スバシアルin SENDAI」が本学大学講堂で開催され、約1100人が無料招待されました。



この公演は震災の影響で中止になってしまった仙台公演を、レ・フレールの熱意とキリンホールディングス特別協賛により、本学で実現したものです。震災直後に作った曲「Prayer of Boogie」をはじめ、全17曲が約2時間に渡り披露され、思いがけないクリスマスプレゼントに会場は大きな歓喜に包まれました。

MG Today

宮城学院で学んだこと

中学3年 菅 真理子

宮城学院に入学してから約3年、時が経つのが、とても早いように感じられる。期待と不安を胸に抱きながら、初めて登校した入学式の日も昨日のように思い出すことができる。

私がこの宮城学院で3年間を過ごし、学んだことがいくつかある。ひとつは団結力。運動会や合唱コンクールなどといった、さまざまな行事の中で皆で協力し、一つ一つ造り上げてきたことによって、クラスや学年の枠を超えて絆を深め団結し、一人一人が成長することが出来たと思う。この団結し、皆で支え合っているということは、けっして容易なことでは

宮城学院が母校になる嬉しさ

高校3年 高橋 理子

宮城学院で過ごした3年間で、私はたくさんのことを学びました。中でも生徒会運営諸問会の活動は私にとってとても意味のある貴重な時間です。宮城学院は、生徒自身で動かなければ、行事をはじめ何もかも行われない所です。これは、宮城学院はやりたいことを生徒が主体的にできるということです。私は生徒会運営諸問会の活動でこのようなことを強く感じました。何事もチャレンジ精神が生まれたらまずやってみる。そして実現に向け自分たちで努力していきます。考えてみると、これは社会に出てから自分自身を発揮する際に必要な力です。そして、ありがたいことに宮城学院には私たちが後押ししてくれる友人や先生方がたくさん居ます。宮城学院での経験と、宮城学院に居て抱いた希望を胸に、この先自分らし



宮城学院では、先生方や友人たちに恵まれ大変有意義な学生生活を送ることが出来ました。国語の教員になりたい、という夢を抱いて日本文学科に入学し、教員になるために本格的に考え始めたのは3年のときです。教員採用試験の勉強を始めようと、参考書等を買ってはみたものの、どのように勉強すれば良いのか分からず、教職センターで聞いてくださった勉強会に参加することにしました。他学科の学生たちと同じ空間で勉強することは私にとって大変刺激となり、一人で勉強していれば得られない情報も得ることができ、試験に大変役立ちました。また、面接練習もして頂き、きめ細かいサ

音楽への姿勢を変えた4年間

音楽科4年 若桑 杏奈

4年前、音楽の勉強をしたくて宮城学院へ希望を胸に入学生たが、思いの外、音楽以外に勉強することが多く大変であった。だが、振り返ってみると幅広い分野を学べたことは自分の精神性と音楽を向上させるうえで必要であったと感じている。そ

こから本質を求め考えるということや学ぶこともできた。そして、音楽科の様々な授業やレッスンから学べたことは音楽の技術的、知識的な面だけではなく、ひとつひとつ真摯に曲と作曲家に向き合い、細かく多方面からアプローチし、自分の音楽へと

なく、ぶつかり合うこともあった。だが、それを乗り越えたことにより、絆もより一層深まり、学校生活を楽しく過ごすことができた。

もうひとつは、努力し継続することの大切さである。私は部活でも所属しているバドミントンが大好きだ。入部したての頃に初めて見た先輩たちの試合が今でも心に残っている。入部するまで遊びでしかしたことのなかったバドミントンが

競技になると、こんなにも迫力があった、スピーディーなものなのだ、とても驚いた記憶がある。バドミントンは、一つの技が繊細で難しく、すぐには打てるようにならない。上手くなるには努力し、それを継続していくことが大切だ。飽きっぽく三日坊主の私にとって、何かを続けていくことは楽ではない。途中で挫折してしまうのではないかと思った。だが、バドミントンの練習は続けられ

ポートのお陰で教員採用試験に合格することができたと思います。日本文学科では教員免許以外にも様々な資格を取得することもできますし、教職に関しても他校の先生に講義をして頂くこともあり、様々な観点から勉強することができました。宮城学院で学んだ多くのことを、これから始まる教員生活に生かしていけるよう努力していきたいと思います。

練り上げていくための過程など、音楽が音楽であるためには何が必要かというとても大切なことを学べたと感じている。大学を卒業し、年を重ねることに指導は受けにくくなり、むしろ指導する側へと変化していく。この4年間で得た精神性と考える力、そして音楽に対する姿勢を大事にして、自分自身を高めていけるような一社会人になれるよう努めていきたい。

